

令和 3 年 4 月 13 日現在

機関番号：37107

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12559

研究課題名(和文)在宅ホスピスでの患者と家族に対するナラティブ・アプローチのプログラム開発

研究課題名(英文) Development of narrative approach programs for patients and family caregivers at home hospice

研究代表者

安藤 満代 (ANDO, MICHIO)

第一薬科大学・看護学部・教授

研究者番号：10284457

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：在宅ホスピスを利用している患者に対して先行研究をもとにして作成したナラティブ・アプローチを実施した。その結果、スピリチュアリティは上昇、身体症状は低下、希望が向上する可能性が示唆された。語りの質的分析から、患者は自己概念と自己理想を統合していき、生きる希望を見出していると考えられた。また家族へのナラティブ・アプローチによって家族のQOLを高めることに有効であることが示唆された。家族は語りを通して、家族のレジリエンスを高めることで、QOLが高まると考えられた。質問項目を精選して、最終的に患者用と家族用にナラティブ・アプローチのプログラムを仕上げた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

患者を対象としたナラティブ・アプローチの完遂率は83%であり、実施可能性を示した。質問紙の結果から、患者のスピリチュアルケアや希望の向上として可能性、患者のQOL向上の有効性、精神的問題の軽減の可能性などが客観的に示された。これらのことからナラティブ・アプローチが在宅ホスピスを利用する患者と家族に適用でき、精神的心理的側面のケアとして有効であることを示唆できたことは、学術的に意義深いと考えられる。また患者は、自己理想と自己概念を一致させていくことで今後の希望を見出し、家族は語りからレジリエンスを高めていくという心理過程を経ることが明らかになることができたことは意義深いと考えられる。

研究成果の概要(英文)：We conducted a narrative approach made from previous studies for terminally ill patients at home hospice. Their spirituality and hope tended to increase and physical symptoms decreased. From analysis of narratives, patients integrated Self-concept with Self-ideal, resulting in finding hope. A narrative approach for family care givers suggested useful to increase their QOL. Their resilience was promoted, resulting in increasing QOL through a narrative approach. Selecting question items, we developed narrative programs.

研究分野：精神看護学

キーワード：終末期 在宅療養 ナラティブ・アプローチ 看護師 スピリチュアルケア QOL 精神的健康度

1. 研究開始当初の背景

近年、終末期の療養の場所として在宅で最期まで過ごしたいと考える患者は多くなったが、まだ十分には進んでいない。終末期患者には、身体面と同様の精神的心理的な問題も発生し、その対応は難しいところがある。病院では、精神科の医師、看護師、臨床心理士などの専門家が対応できるが、在宅ではまだ専門家がケアにあたることは少なかった。そこで、在宅で療養する患者への精神的心理的側面の支援として看護師が実施できるナラティブ・アプローチのプログラムの開発が必要と考えた。ナラティブ・アプローチは、発達障がい者のナラティブ(山本、2016)、老年患者の語りの変化の研究(吉村、内藤、2004)、看護師の語りの研究(紙野他、2020)などがあるが、在宅で終末期を過ごす患者や、患者を介護する家族へのナラティブ・アプローチに関する研究はほとんどみられなかった。

2. 研究の目的

本研究の目的は以下の3つであった。

- 1) 先行研究を元に在宅で療養する終末期患者へのナラティブ・アプローチを実施し、その効果を測定するとともに、患者の語りから患者の心理過程を明らかにする。
- 2) 在宅で療養する終末期患者を介護する家族へナラティブ・アプローチを実施し、その効果を測定するとともに、家族の語りから家族の心理過程を明らかにする。
- 3) 在宅で終末期を過ごす患者と家族を対象に、看護師が実施できるナラティブ・アプローチのプログラムを開発する。

3. 研究の方法

- 1) 対象者：終末期を在宅で療養する患者 10 名、終末期患者を介護する家族 10 名であった。
- 2) 調査方法：具体的な方法については以下に示す。

【患者へのナラティブ・アプローチ】

協力施設から対象者を紹介していただいた後、研究者(看護師)が参加の同意を得た。インタビューは1回1時間が2回あり、面接では以下のことを質問した。第1回目には、「病気になる前の生活」「病気がわかってからの生活」「在宅療養で良かったと思うこと」「在宅療養で困ったと思うこと」であった。第2回目の面接では、「在宅療養をしての自分の変化」「自分が大切に思うこと」「人生について思うこと」「今後の希望」であった。介入前後に、スピリチュアリティを測定する FACIT-Sp(野口ら、2004)、人生満足度尺度(角野、1994)、患者の QOL を測定する CoQoLo (Miyashita, et al. 2015) に回答していただいた。

【家族へのナラティブ・アプローチ】

協力施設から対象者を紹介していただき、研究者が説明して同意を得た。面接は1回1時間が2回あり、以下の質問をした。第1回目の面接で「介護を始める前の生活」「在宅で介護をしようと思った理由」「在宅での介護で良かったと思ったこと」「在宅での介護で困ったと思ったこと、またその対処」について、第2回目の面接で「介護を通して自分の変化」「自分が大切に思うこと」「介護を含めての自分の人生について思うこと」「今後の希望」であった。介入前後に、家族の QOL として CQOLC (安藤ら、2013) の介護の肯定感、GHQ12 (中川・大坊、1985) 人生満足度(角野、1994) に回答していただいた。

4. 研究成果

1) 患者へのナラティブ・アプローチ

10名の患者に対して行い、質問紙を用いた結果を表1に示す。これより、統計的に有意ではなかったが、Facit-Sp が上昇していることから、生きる意味、人生の意味感が向上、身体症状が低下、希望が向上する可能性があることが示唆された。人生満足感について変化はみられなかった。

表1 患者に対するナラティブ・アプローチ前後の質問紙の得点

Scale	Pre	Post	p value
Facit-Sp	32.1 (9.7)	33.3 (10.8)	p=0.67
Physical (FACT)	13.7 (7.6)	11.5 (5.5)	p=0.29
Life Satisfaction	22.3 (8.2)	22.8 (8.7)	p=0.57
Hope	15.0 (3.6)	16.3 (4.4)	p=0.37

各質問を質的に分析した結果、語りから以下のカテゴリが抽出された。「在宅療養で良かった

こと」は、<時間を自由に過ごせる><外の社会に開かれた関係><家族との時間を多く過ごすことができる><スタッフとの親密な関係と強い信頼感><通院による負担の軽減><自立した生活が維持できる>であった。以下、同様に、質問項目に対する語りからカテゴリを抽出した。これらのカテゴリから、患者の心理的な変化を図1にまとめた。

患者は、在宅で良かったことを感じるが、困ったことに直面していた。これに対しては、医師や看護師、医療ソーシャル・ワーカーが対応することで、軽減していた。在宅療養で自分について考える時間ができ、家族や世代の繋がりといったことの大切さに気付くとともに、病気を含めた人生であることを受容し、自己概念と自己理想を統合していき、生きる希望を見出していると考えられる。

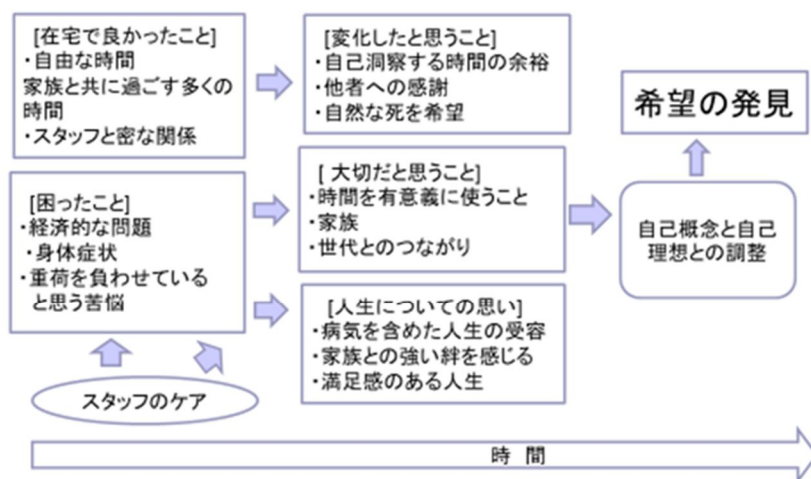


図1 患者の病の受容プロセス

2) 家族へのナラティブ・アプローチ

家族へのナラティブ・アプローチを実施した前後の質問紙の得点について、ノンパラメトリック検定を実施した結果表2に示す。CQOLCの得点は、有意に上昇していることから、家族のQOLを高めることに有効であることが示唆された。またGHQ12は、有意ではなかったが、得点は下がっていることから、精神的な問題が低下していることが示唆された。人生満足度は変化がみられなかった。これより、家族へのナラティブ・アプローチは、介護する家族QOLを向上させることに有効と考えられる。

表2 患者を介護する家族へのナラティブ・アプローチによる質問紙の得点の変化

Scale	Pre	Post	P value
CQOLC	23	24.8	$P < .05$
GHQ12	13.1	11.3	ns
Life Satisfaction	21.0	21.5	n.s.

「介護をして良かったこと」の語りの質的分析から、「安心感がある」「家族の絆が強まる」「自宅でのケアに満足する」「本人と家族がともに時間を過ごすことができる」「介護者も自分の時間を過ごすことができる」「自分の最期や介護について準備する」が得られた。これと同様に質問項目については、カテゴリが抽出された。

困難なことについては、主治医、看護師、ソーシャル・ワーカーに相談することで、対応できる場所は対応できていた。しかし、患者が寂しさや辛さを家族に訴えるとき、すなわちスピリチュアルペイン（霊的苦悩）を表出したときには、その対応には困難を感じていた。

全体的にカテゴリ全体を統合して、家族がどのような心理過程であるかをまとめてみた

（図2）。家族は、患者を介護することで、大切なことの認識を深めるとともに、介護を含めた自分の日常生活に適応し、また自分自身の介護の態度についても洞察するようになった。そこで、希望を見つけるなかで、家族のレジリエンスも高まり、QOLも向上したのではないかと考えられた。

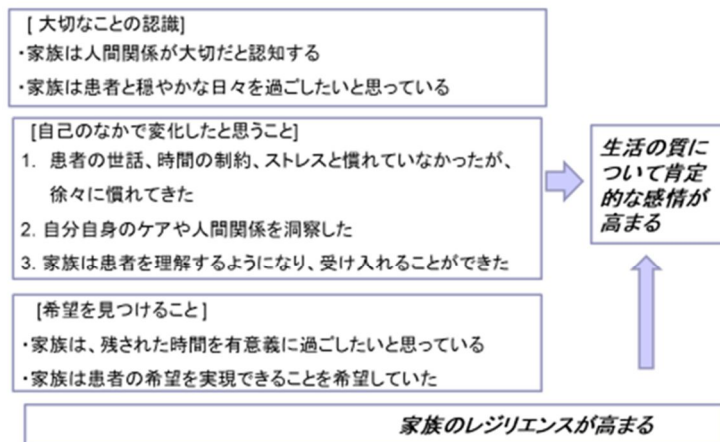


図2 介護する家族の心理の変化

3) プログラムの開発

最初のナラティブ・アプローチのプログラムの原案では、患者が病気になる前の生活、なつてからの生活の変化を尋ねる質問項目も含めていたが、患者の生い立ちや、病歴が多様であり、それらを定期的に入れることは難しいと考えられた。それらは、イントロダクションとして、必要に応じて入れることとし、最終的なプログラムを以下のように仕上げた(表3)。

表3 患者へのナラティブ・アプローチのプログラム例

質問内容	
1) イントロダクション:	最近の体調や気分 病気になる前の生活
2) 在宅療養について	良かったこと 困ったこと、それに対処したこと
3) 在宅療養をしているなかでの自分のなかでの変化	
4) 在宅療養をしているなかで大切なことへの気づき	
5) 人生についての思い	
6) 今後の希望	

また患者を介護している家族についても、介護を始める以前の生活は多様であるので、その質問項目は削除して、最終的なプログラムを仕上げた(表4)。

表4 患者を介護する家族へのナラティブ・アプローチの例

質問項目
1) 在宅で介護をしようと決めた理由
2) 家族にとって在宅療養で良かったこと、困難に感じたこと
3) 介護をしているなかでの自分のなかでの変化
4) 大切だと思うこと
5) 介護を含めた自分の人生について思うこと
6) 今後の希望

本研究において、終末期を在宅で過ごす患者と家族に対するナラティブ・アプローチのプログラムを開発することができた。ただし、参加者もまだ十分ではないので、今後さらに検討することも必要と考えられる。

文献

安藤早紀, 原田真理子, Weitzner, MA, 他. (1993) Caregiver Quality of Life Index- Cancer (CQOLC) 日本語版の信頼性・妥当性の検証. Palliative Care Research, 8(2), 286-92.

角野善司 (1994) 人生に対する満足度尺度(the Satisfaction With Life Scale[SWLS]日本版作成の試み, 日本教育心理学会発表論文集, 36, 192.

- 紙野雪香・野村直樹 (2020) 看護実践におけるナラティブ, N:ナラティブとケア, 第7号, 遠見書房
- Miyashita, M., Wada, M., Morita, T. et al. (2015) Development and validation of the comprehensive quality of life outcome (CoQoLo) inventory for patients with advanced cancer, *BMJ Supportive Palliative Care*, Oct,22.
- 野口海・大野達也・森田智視他 (2004) がん患者に対する Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual(FACIT-Sp) 日本語版の信頼性・妥当性の検討
- 中川泰彬・大坊郁夫 (1985) 日本版 GHQ 精神保健調査票(手引き). 日本文化社.
- 山本智子(2016) 発達障害のある人のナラティブを聴く. ミネルヴァ書房.
- 吉村雅世・内藤直子(2004) 看護ケアにナラティブ・アプローチを導入した老年患者の語りの変化の研究. *日本看護科学学会誌*, 24, 3-12.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 6件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 Ando, M., Kukihara, H., Yamamoto, M., Ninosaka, Y.	4. 巻 9
2. 論文標題 Contents of care and perception of home hospice nurse who work at visiting medical treatment hospitals.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Open Journal of Nursing	6. 最初と最後の頁 801-808
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/ojn..2019.98061 Aug,8,2019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ando, M., Kukihara, H., Yamamoto, M., Ninosaka, Y., Saito N.	4. 巻 10
2. 論文標題 Development of narrative approach for family caregiver's QOL at home hospice and contents of narrative.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Psychology	6. 最初と最後の頁 1407-1417
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/psych..2019.1011092 Aug, 15,2019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ando, M., Kukihara, H., Yamamoto, M., Ninosaka, Y., Saito, N.	4. 巻 9
2. 論文標題 Perception of reasons of decision making for home hospice care by family caregivers.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Open Journal of Nursing	6. 最初と最後の頁 1013-1021
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/ojn..2019.910075 Oct 22,2019	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ando, M., Kukihara, H., Yamamoto, M., et al.	4. 巻 8(2)
2. 論文標題 Feasibility and efficacy of Narrative Approach for spiritual well-being of terminally ill patients at home hospice.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Annals of Nursing and Practice	6. 最初と最後の頁 1096
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ando, M., Kukihara, H., Yamamoto, M., et al.	4. 巻 10
2. 論文標題 Acceptance process model of patients' life with terminally ill in home hospice and development of a narrative approach for nurses.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Cancer Therapy	6. 最初と最後の頁 in press
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4236/jct.2019.104025	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ando, M., Yamamoto, M., Ninosaka, Y., et al.	4. 巻 4(1)
2. 論文標題 A pilot study of narrative approach for terminally ill cancer patient at home hospice.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 clinical Case Reports and Reviews.	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15761/CCRR.1000380	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 3件)

1. 発表者名 安藤満代・久木原博子・山本真弓
2. 発表標題 在宅ホスピスで療養する終末期患者の病の受容過程と看護師によるナラティブアプローチのプログラム開発
3. 学会等名 第39回日本看護科学学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤満代・山本真弓
2. 発表標題 在宅での看取りを決めた家族の意思決定した要因および介護における有益性と困難感の認識
3. 学会等名 日本精神保健看護学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 安藤満代
2. 発表標題 在宅ケア実践におけるライフレビューの可能性
3. 学会等名 第24回日本在宅ケア学会学術集会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安藤満代、久木原博子、山本真弓
2. 発表標題 在宅ホスピスでの訪問診療に関わる看護師による患者と家族へのケアリングの内容
3. 学会等名 看護科学学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ando, M., Morita, T., Tamura, K. et al.
2. 発表標題 Development of a program of the Short Term Life Review for terminally ill cancer patients by clinical nurses.
3. 学会等名 BIT's 5th Annual World Congress of Geriatrics and Gerontology-2017（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ando, M. & Yamamoto, M.
2. 発表標題 Short-Term Life Review for terminally ill cancer patients in home hospice may be useful for pchological aspect.
3. 学会等名 21the East Asian Foruma of Nursing Scholars（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ando M, Kukihara H, Yamamoto M.
2. 発表標題 Contents of a narrative of a family member who took care of a terminally ill patients
3. 学会等名 The 6th International Research Confernece of Wold Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 安藤満代	4. 発行年 2020年
2. 出版社 木星舎	5. 総ページ数 87
3. 書名 ナラティブ・アプローチ - 在宅ホスピスでの患者と家族の物語	

1. 著者名 安藤満代・伊藤華野	4. 発行年 2021年
2. 出版社 木星舎	5. 総ページ数 53
3. 書名 ナラティブを誘うためのマインドフルネス	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山本 真弓 (YAMAMOTO MAYUMI) (30310915)	山陽学園大学・看護学部・教授 (35310)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	久木原 博子 (KUKIHARA HIROKO) (50268950)	福岡大学・医学部・教授 (37111)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関